ゼミの談話の接続表現

学籍番号　S15（漢字表記）
所属・学年

1. はじめに

私たちが普段話すとき、接続表現は重要な役割を果たす。「では」、「それでは」のように、議論を始めるときに用いられ、また、文章の区切りとなり、論理構造の理解を助ける役割も果たす。そのため、接続表現を対象とした様々な研究が行われている。その一つの例として講義での接続表現をあげられる。石黒(2010)は講義での接続表現には、様々な種類があり、その機能の一つとして講義の重要情報を表示する機能を持つと指摘する。このように研究の仕方の中でも、各場面での接続表現の機能について研究が行われている。選考研究の例の場合、講義で使われる接続表現の研究だった。この論文では、よりニッチなところにターゲットを絞ってゼミの談話においての接続表現を研究したい。

では、なぜゼミが研究対象で、この研究がどういう意義をもつのか。日本の大学の場合、ゼミに所属し、そこで発表や議論をすることが多い。しかし、ゼミでの接続表現についてあまり研究されていないことが現状だ。日常会話とはまた異なるゼミの談話の接続表現を分析することによって、ゼミの談話の性格、特徴の理解を高めることができるだろう。それは、特に、留学生にとって助けになることだと言える。多くの留学生の場合、ゼミという形態の議論に慣れていないため、この論文が留学生に手引になることを期待する。

2. 先行研究と本研究の位置付け

ゼミの談話における接続表現については、あまり研究がなされていない。関連のある研究として、講義の談話の接続表現がある。接続表現の先行研究としては、市川孝の「国語教育のための文章論概説」と、講義の接続表現の研究である、石黒圭の「講義の談話の接続表現」がある。

まず、「国語教育のための文章論概説」では、接続表現の分類を行っている。以下のような分類方法で分類している。

表１：接続表現の類型と例

類型	定義・例
順接	前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べ る型(だから/それで/したがって/すると/かくて)

逆接	前文の内容に反する内容を後文に述べる型(し かし/けれど/だが/それなのに/ところが)
添加	前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型（そして/ついで/そのうえ/また/ならびに)
対比	前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べ る型(というより/そのかわり/それとも/あるい は/または)
転換	前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述 べる型(ところで/ときに/さて/それでは/ともあれ)
同列	前文の内容と同列と見なされる内容を後文に重 ねて述べる型(すなわち/つまり/ようするに)
補足	前文の内容を補足する内容を後文に述べる型（なぜなら/というのは/ただし/もっとも/ちなみに)

出所）市川(1978)をもとに川端(2009)が作成したものを引用

一方、「講義の談話の接続表現」では、講義での接続表現の使用状況を分析し、使用された接続表現がどういう機能をもつかについて書かれている。使用状況においては、11 の講義資料から分析した結果、総分数に対する接続表現の出現頻度は 36.9%であった。そして、講義の接続表現は、講義の構造を表示する機能、講義の重要情報を表示する機能があるという。例えば、「つまり」の場合は重要情報を表示する接続表現として機能することが多く、先行文脈の要約が、「つまり」の次に叙述されるという。

この二つの研究を踏まえ、講義ではなく、ゼミの談話という新しい分野の研究を行う。日常会話ではなく、一人で話す講義ともまた異なるゼミという談話は、今まであまり研究が進んでいないことから、学術的価値が十分あると言えるだろう。

3. 研究の資料と分析の方法

研究の資料は、某国立大学大学院の某ゼミの２回分のスクリプトを利用する。両方とも、構成員は異なるが、言語をテーマとする内容で、約８人の人が参加した。約４０分間、発表者と質問者が質疑応答する内容で構成されている。

このデータをもとに、「講義の談話の接続表現」の分析方法を倣い、どの接続表現が何回

使われたのかを数え、市川(1978:89-93)の接続表現分類法を用いて分類する。これによって、どのタイの接続表現が何回の頻度で使われたのかが明確になる。つまり、ゼミの談話の定量的分析を行う。

そして、その接続表現がどういう機能をするかについて分析する。先行研究の石黒(2010)の場合、講義にその研究対象を絞って研究を行った。この論文では、ゼミの特殊性を十分生かし、質問者と発表者の接続表現にどういう違いが見られるか、なぜそういう違いが見られるかの原因を分析する。

4. 分析結果

分析結果を表で表したのが表１である。まず、「で」が質問者、発表者のどちらの場合においても最もよく使われていることがわかる。

発表者Ａ　「で、えっと、Krashen（クラッシェン）という、その、第二言語習得の研究者も、その、言語の習得にはその…」

質問者 A　「で、今のところ、あのー、こういった先生方の判定とか、インタビューの結果が（発表者Ａ：はい）あるわけですけれども、うーん、現段階では、どのような、はい、結論に結びつきそうな感覚を持っていらっしゃいますか↑」

質問者Ｂ　「で、今のところで、私（発表者Ｂ：はい)、因子って言っても分からないので、こう、2 番目のほうが一番不安を感じているところですか↑」

このような使い方で、発表者が発表時に使用した接続表現の 48%(56 回中 27 回)、質疑応答時に 50%（14 回中 7 回)、「で」だ。質問者も全体の４０回中、「で」の占める割合が半分もある。発表者、質問者の役割を問わず、このような結果が出たのは、非常に面白い。

一方、発表者が発表の時に、「で」の次によく使われる接続表現の類型は「添加型」だ。一つだけを繰り返して使うわけではないが、全体で合わせると発表時に使った接続表現の 39%が、この「添加型」だ。例を見てみよう。

発表者 B「あとは、えーと、中国語の文章を書くことに対しては、得意と答えてくれたひ、たのに、日本語の、レポートを書くことに対しては、なんというか、苦手と答えてくれた人に対しても、あの、なにか分析したいなと思っています」

発表者 B(質問者の質問に対して)「そうですね、あの。（間：2 秒）まずは、あの、そもそも書きたい内容がなくて、何を書けばいいのかという項目も、あのー、一応あのー、こちらの不安項目の中に入っていますが。はい、たぶん、あのー、そうですね、2 番のところなんですが」

ここで、注目すべき特徴は、添加型は発表者の発表ではよく見られるが、質問者の質問では見られない。発表では「添加型」を愛用した発表者でさえ、質疑応答ではその使用頻度が少ない。

もう一つ目立つ傾向としてあげられるのが、「でも」の使用頻度である。どちらの談話においても発表の占める割合が高く、接続表現の使用頻度も５６回で、発表者の質疑応答時の 14 回や質問者の 40 回に比べて多い。単純に量だけを考えると、発表時の「でも」の使用頻度が一番多いはずだが、実際は予想を完全に裏切る結果が出ている。

発表者 B（質問者の質問に対して）「でも、勝手に 15 番を他の因子のグループに入れることができないので、今はこのままに残っていますが」
発表者 A（質問者の質問に対して）「でも、あの、二つ目の実験でやっていることは、日本語の絵本をどうやって選んでいくかっていうことなので、ちょっと、そこは、迷っているところです」
質問者 A1「でも、楽しめるかどうか難しい。楽しめるかもしれないですよね↑」

これも非常に興味深い結果だと言えよう。では、これらの結果を基に、なぜこのような結果が出たのか、なぜこのような傾向が見られるかを以下の考察で考えたい。

表 2: ゼミの談話における接続表現の使用頻度

類型	接続表現	発表者				質問者	
		発表	割合(%)	質疑応答	割合(%)	質疑応答	割合(%)
順接型	(それ)で	27	48%	7	50%	20	50%
	だから	0	0%	0	0%	3	8%
	そうすると	0	0%	0	0%	2	5%
	ということで	0	0%	0	0%	0	0%
	そのために	0	0%	0	0%	0	0%
	そこで	1	2%	0	0%	0	0%
添加型	それから	3	5%	0	0%	0	0%
	そして	4	7%	1	7%	0	0%
	まず	5	9%	2	14%	2	5%

	また	2	4%	0	0%	0	0%
	つぎに	3	5%	0	0%	0	0%
	あとは	4	7%	1	7%	2	5%
	最後には	1	2%	0	0%	0	0%
同列型	つまり	0	0%	0	0%	1	3%
	たとえば	0	0%	0	0%	2	5%
	あるいは	0	0%	0	0%	0	0%
	いずれにしても	0	0%	0	0%	0	0%
逆接型	でも	1	2%	3	21%	4	10%
	ところが	0	0%	0	0%	0	0%
	それなのに	0	0%	0	0%	0	0%
	しかし	1	2%	0	0%	0	0%
	けど/けれども	0	0%	0	0%	1	3%
転換型	では	3	5%	0	0%	2	5%
補足型	ただし	0	0%	0	0%	0	0%
	というのは	0	0%	0	0%	1	3%
対比型	それに対して	1	2%	0	0%	0	0%
	というか	0	0%	0	0%	0	0%
	合計	56	100%	14	100%	40	100%

5. 考察

発表者の方は主に研究内容を発表しているのに対し、質問者の方はその内容について質問をする。しかし、どちらにしても一番よく使われる接続表現は「で」だ。このような現象について、川端（2009）は「で」が場合によって異なる機能をする多様な使い方ができるからだと述べる。例えば、「で」は「ゆえに」、「したがって」のような順接の接続表現の代用としても使え、「ところで」のような逆接の代用としても使える。また、転換型の「ところで」、「さて」の代わりでも使える。このように、「で」は様々な意味で使えることのできるために、頻繁に使われるのが当たり前かもしれない。

一方、発表者が発表の時に、なぜ「添加型」を頻繁に使うのだろうか。発表では使う反面、質問ではほとんど使わない。この現象を理解するためには、まず、「添加型」の意味を理解する必要がある。市川(1978)は、添加型を「前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型」と定義する。つまり、論理を説明するときに、より詳しく説明するための接続詞なのである。発表者が自分の意見を論理的に詳しく説明するために、発表時には頻繁に使うのであるが、質疑応答の際には、一つの質問に対する答えとなるため、長く詳しく説明す

る必要がないのだ。石黒(2010) の講義の接続表現上位１６位（表 3）・新聞の接続表現上位１６位（表 4）と比較してみよう。ゼミの談話とその性質が似ていると言える講義の接続表現の頻度から、添加型の使用頻度が高いことを読み取れる。しかし、新聞記事では、そのような傾向は見られない。ある事象に対して詳しく説明する講義やゼミの発表では「添加型」の使用が目立つが、説明だけでなく、批判、主張などの様々な目的で書かれる新聞では「添加型」だけでなく満遍なく使うのである。

表 3：講義の接続表現上位 16 位

順位	接続表現	頻度	類型
1	で	1108	順接型
2	それから	251	添加型
3	そ（う）して	146	添加型
4	つまり	99	同列型
5	だから	80	順接型
6	んで	53	順接型
7	でも	51	逆接型
8	ところが	49	逆接型
9	ですから	48	順接型
10	それで	43	順接型
11	たとえば	40	同列型
12	ただ	40	補足型
13	そうすると	38	順接型
14	では	37	転換型
15	しかし	34	逆接型
16	じゃ（あ）	31	転換型

表 4：新聞の接続表現上位 16 位

順位	接続表現	頻度	類型
1	しかし	16994	逆接型
2	また	12565	添加型
3	だが	6920	逆接型
4	一方（で）	6798	対比型
5	さらに	4270	添加型
6	ただ	4051	補足型
7	でも	3217	逆接型
8	そして	3189	添加型
9	ところが	2385	逆接型
10	だから	1884	順接型
11	たとえば	1601	同列型
12	それでも	1371	逆接型
13	そこで	1281	順接型
14	しかも	1094	添加型
15	その上（で）	819	添加型
16	ただし	788	補足型

最後に、もう一つ注目すべき点として、質問者の使用が目立った接続表現の「でも」だ。まず以下の例を見てみよう。

質問者Ａ１　音を楽しむみたいな。

発表者Ａ　そうなんです。そうなんです。谷川俊太郎さんの絵本もいろいろあるんですけど（先生Ａ：うん）、先程おっしゃったその『もけらもけら』みたいな全くナンセンスな音だけを出すようなものとか、そういう、うーん、読んで、なんでしょう、やっぱ楽しめないもの（笑い）なんですね。なので適してるって、楽しいとかいうとちょっとすごい批判されちゃうと思うんですけど、そういうこ

となんだと思ってます。楽しめ…

質問者Ａ１　でも、楽しめるかどうか難しい。楽しめるかもしれないですよね↑。

絵があって（発表者Ａ：はい）、おもしろい音があって、そのやっぱ適するっていう。何を…

発表者Ａ　うーん。

この例からわかるように、質問者は発表者の説明に対して疑問を呈している。そこで意見に反論するために使う接続表現が、「でも」なのだ。多くの場合、「でも」はこのような使い方をされているため、質疑応答の時間ではよく現れる。一方、発表の時には滅多に使われない。説明している時に、自分の説明に対して問いかけるのは矛盾するからだ。

6. まとめ

本稿では、実際のゼミの談話を分析し、その中で使用されている接続表現の傾向と理由を述べた。それは、「で」の圧倒的な使用頻度とその理由、発表者の「添加型」の使用と講義との類似点、そして、批判基調で「でも」の使用が目立ったところである。しかし、課題も残っている。データが小さいために、客観性に欠く恐れがある。さらにデータを集めて分析を行う必要がある。加えて、講義との比較以外にも、一般の会議、討論といったあらゆる談話との比較で、ゼミならではの特徴を明確にすることを期待する。

参考文献

市川孝（1978）「国語教育のための文章論概説」教育出版 p. 89−93

石黒圭(2010)「第７章 講義の談話の接続表現」佐久間編著 p.138-152

川端元子(2009)「論理的文章における接続表現の機能-学生による作文の分析を通して-」『愛知工業大学研究報告』44、p.17-26